大地

第 61 号
2020. 7.3.発行
浄 國 寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎 睦

仰ぎつつ休みつつ歩す花の下
— 五智居多が浜にて —
限りなき浪寄す配所風五月
囀(さえずり)は山毛欅(ぶな)千本の梢(こずえ)より
留守(るす)の役いただき昼寝ほしいまま
頬(ほほ)の蚊(か)に力の入(はい)る平手打(ひらてうち)
春苺(はるいちご)ワイングラスに盛って見る

句集『朝の光』より
平成八～九年

カタカナ言葉

山崎隆史

「スーパースプレッダー」「オーバーシュート」「ロックアウト」「クラスター」…。新型コロナウイルスへの感染が広がりはじめ、使われるようになったカタカナ言葉です。

世の中にはカタカナ言葉があふれています。「イノベーション」「ドラスティック」「コンテンツ」「スキーム」「アジェンダ」「コミット」など耳慣れない言葉を多用されると、何となく意味は分かるけど日本語で言えば良いじゃあないか、と反感を覚えたりします。

最初に挙げた、新型コロナの流行と共に使われるようになったカタカナ言葉については、専門家が使っていた医学（感染学）用語を、日本語の訳語の定まる前に使わざるを得なかった、という事情があるようです。

すっかり定着してしまったカタカナ言葉もたくさんあります。今更「コンピュータ」を「電子計算機」なんて言いません。老人福祉の世界でも、法的に定められた「通所介護（つうしょかいご）」、「介護支援専門員」よりも「デイサービス」「ケアマネ（ケアマネージャー）」の方が一般的なようです。「改築」より「リフォーム」の方が、便利で良くなるような印象を持つ人も多いでしょう。

日本語直訳だと余計なイメージが付いていたりニュアンスが異なってしまう場合もあります。「運動選手」と「アスリート」とでは、前者は競技をやっている人、後者は趣味の人も含めて本格的に運動をやっている人、という感じで少し範囲が違う気がします。「ハラスメント」を「嫌がらせ」と訳しますが、日本語でいう「嫌がらせ」でなくても「ハラスメント」になる場合はあるでしょう。

あえて耳慣れない言葉で、より強く印象付けるという効果もあるかも知れません。テレビなどで「ステイホーム」「キープディスタンス」と標語のように繰り返し言う事で、「家に居て」「お互い距離を保って」と呼び掛けるよりも、定着したと思います。

カタカナ言葉でなくても、専門用語など知らない言葉を使われると、門外漢にとっては分からず、戸惑うものです。私も、新入社員の時や、実家に戻って仏事の勉強を始めた時、知らない言葉だらけで頭にハテナマークが浮かんだものです。

ルー大柴さんの「ルー語」はカタカナ言葉というか英単語を交える話し方ですが、簡単で分かりやすい単語だけを使っているため、受け入れられやすいのだと思います。つまり、カタカナ言葉にせよ他の言葉にせよ、みんなに分かるようなイージーなワードをチョイスするのが大事なのです。

ATMだって眠くなる？

北本町3 横関レイ子

この冬も暖冬小雪である。十二月、一月だというのに、高田の街には全く雪がない。本当にここがかって有名な豪雪地帯といわれた土地なのかと、真っ青な空を見上げながら思わず考え込んでしまう。幾多の大雪の年を経験し、切ない思いで思い返すことの出来るシニア世代として、自然界に於ける何かしら不気味な気配さえ感じてしまうのは、はたして私だけであろうか。

冬に雪が降るということは自然の摂理に適うことであり、早くも今年の夏の水不足が懸念されているし、また雪がないことで田んぼや畑の害虫が死なず、農作物にも多大な影響を与えるという。

暖かくて困るのは、何も雪国だけの話ではない。先日もテレビを見ていたら、関東地方の農家の方がインタビューに応じて話していた。あまりにも暖かいので、大根が例年の三倍の大きさに育ってしまった、というのである。そして、その太くて大きく立派に生育した大根は、いわゆる規格外なので出荷できず廃棄処分せざるを得ないのだという。そんな話を聞くと、元農家の娘としては他人事ながらも悲しくて、映像を見ているだけでも涙が出そうになるのであった。

さて話は変わるが、私は毎年年の瀬になると、少額ながらAとBの二つの国際支援団体に寄付をしている。それで昨年の十二月にも、最寄りの郵便局へ出掛けていった。

金額的には、両方同じ額である。しかし、振込手数料はというと、Aの赤い伝票は無料であるのに対し、Bの青い伝票の方は有料である。その上窓口で支払うと手数料は二百三円かかるが、ATMでの送金だと百五十二円だと教えられる。手数料もいつの間にかかなり大幅に値上げされていたので、私はATMで手続きすることにした。

先に始めたAの振込は、すんなりといった。ところがBの青い振込用紙は、何度やっても投入口から跳ね返されてくる。そのためどうしてもそこから先に進むことができない。仕方がないので私は局員を呼んで、代わりに操作してもらうことにした。

この日局内にいたのは三人の女性局員だけであったが、一番若いXさんが来てくれた。しかし、彼女もまた同じ場面に突き当たってしまう。そこでXさんはYさんを呼んできて二人であれこれ試してくれるが、一向に埒があかない。

この郵便局は、以前は別の場所にあったが、一年ほど前現在地に越してきた。そして、問題のATMもそのまま一緒に運んできたそうである。だが、最近なぜだか私が使用すると、操作がスムーズにいかない場合が多い。パネルタッチの画面をいくら強く押してみても、全然作動してくれなかったりするのである。

そして、今回は私一人だけでなく、局員が二人がかりでやってみても、結局ATMでの送金手続きを完了させることはできなかった。そのため最後はXさんが手動でコンピューター処理をして、何とか振込を終わらせる結果と成った。私はついに愚痴をこぼしてしまう。

「ここに移ってきてから、どうも私はこのATMと相性が悪いんです」

すると、黙って様子を見ていた一番年長のZさんは、すかさずこう答えたのであった。

「一日中、陽に当たっているから、バカになっているんです」

確かに前の郵便局は、終日陽の当たらない雁木通りの中にあった。それが今では遮る物が何もない地所にあり、しかもATMは建物の南東の端に置かれている。ぽかぽかと暖かい冬日に照らされて、機械でもついうつらうつらと居眠りしたくなるのであろうか。

私はZさんのウイットに富んだ受け答えに感心し、雪のない冬の道を、自転車をこぎながら帰路に就いたのであった。

※この原稿は、コロナ騒ぎの始まる前の本年二月初旬に頂いたものです。遅れに遅れて申し訳ありません。

夏が来ても

山﨑　直子

連日のニュースで伝えられる内容にうんざり、という方も多いだろう今日この頃。できればここの文章でも件のカタカナ三文字に触れたくない、と一人四苦八苦してみたものの、それはそれで不自然なものですね…。

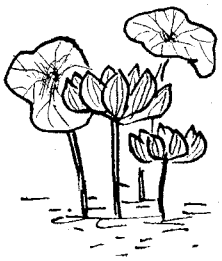
例年あれほど賑やかな高田公園のお花見も、自粛や移動制限の影響か今年は十分の一ほどの人出だったそうです。月に一度の朝の同朋会もこの数か月は中止が続き、お顔を合わせていた皆さんは何をしておられるのだろうと思いながら、平穏な生活というものがこれほど簡単に覆るのかと痛感する日々でもあります。もうTVを見るのも嫌だ、という声が聞こえてくるのも当然ですね。目に見えないものだからこそ振り回され、疑い、慄き、その不安を弱者や他者にぶつけることで溜飲を下げようとするのも人の弱さや愚かさの持つ形のひとつで、きっと私も、立場が変わればその愚かさと無縁ではいられないのでしょう。親鸞聖人のお言葉が身に沁みます。それでも、せめて、家の中が明るいこと(後頁のハナちゃんの回想をお読み下さいませ)が救いでしょうか。歌声は響くよどこまでも。

移動が制限されていたことでご法事も延期が多くなり、めっきり静かなご本堂でしたが、入口近くにはお義母さんのお友だちが送って下さったカレンダーが下がっています。お釈迦様のお言葉を弟子が集めた、「スッタニパータ」という古い仏教聖典から取られた言葉と美しい絵で構成されているのですが、ちょうど緊急事態宣言下だった5月のページはこんなものでした。

怠りは塵(ちり)垢(あか)である。
怠りに従って塵垢がつもる。
つとめはげむことによって、また明知によって、
自分にささった矢を抜け。

原始仏教の聖典、などと聞くと私などには非常に敷居が高いのですが、「自分に刺さった矢」という言葉はまるでウイルスに踊らされて荒れる世界への戒めのようで一瞬どきりとさせられました。その存在にむやみに怯えることはしたくありません。どこかの国の大統領のように軽んじたりすることも、もちろん罹患した人を忌避することもしたくありません。正しい高さの、そして出来る限り水平の眼差しを、濁ることなく持っていたいと思い直すカレンダーの言葉でありました。

※ずっとお休みしていた月に一度の同朋会ですが、そろそろ再開となりそうです。浄國寺HP等にてご確認ください。お待ちしております。



ワン公物語㉑

―華のつぶやき―

山崎　華（慎子代筆）

私は華。パグ犬の雌。六月に入ってとうとう十三才になった。蓮姉ちゃんが亡くなったのが十三才だったので、母さんは時々「華、元気でいてね」と真剣な顔で囁く。母さんは今迄、ペットロス症候群を、よそごととしか捉えられなかったらしい。でも最近は、もし私がいなくなったら相当こたえてしまいそうだと想像して、それを打ち消し自分を励ましているようなのだ。

そんな母さんを見てると、私もいつ迄も母さんの側にいたいな、と思うんだけれど、こればかりはね。マ・イイか！

母さんは鼻唄が大好き。何だか分らない歌をよく口ずさんでいる。残念なことに母さんは歌詞をよく覚えていないらしく、同じ所を堂々巡りしている。そんな母さんを直子姉さんがからかってこう言った。「ウチのお母さんはよく歌います。でも大体はお母さんの作詞、作曲でーす！」母さんは目が点になる。

母さんは自問自答。確かにしっかり覚えて歌ってはいないけど、人さまが聞いて訳の分からない程ひどいのかなあァ。例えば『いい日旅立ち』『コスモス』『舟歌』等々。

「私の作り歌ってことは、全く別の歌に聞こえるってこと？私ってそんなに音痴だったの？」母さんは直子姉さんに抗議する。でも、直子姉さんは決して「冗談です」とは言わない。朗らかに笑うだけ。

母さんは父さんに訴える。でも直子姉さんは、傍らで母さんの不満、憤まんを聞いても、どこ吹く風でコロコロ笑っている。母さんは直子姉さんの歌については一目おいているので、そうか、私の鼻歌はそれ程ひどいのだと思うことにしたらしい。直子姉さんはきっと歌が上手と思う。（そうでなければ母さんが可哀想すぎる）でもマ・イイか！

そして母さんは少しは気にしながら、今日も朝から歌っている。お勝手で、お風呂で何かにつけて鼻歌を口ずさむ母さん。

そう言えば今年は、未だにあの人が来ない。どうしたのだろう。あの人というのはね、川島昭恵さんのことだよ。川島さんは二十年位前から毎年、私の住む淨國寺の本堂で、物語を語ってくれていたのだ。私が生まれる前から、はるばる東京から来てくれていた。川島さんは殆ど目が見えないから、白い杖をついて一人で乗物を乗り継いで来る。私は凄いなと思う。

お仕事である「語り」の為に、八丈島や与論島に行ったり、ロンドンへ旅行したり、行動的な人。映画出演や吹き替えもこなして、本当に前向きな人だ。そして仕事とはいえ、川島さんの「語りの会」が二十年も続いているということは、川島さんの語りの力が本物ということなのだと私は思う。

世の中、コロナの話だらけになってしまったので、あんまり言いたくないのだけれど、つまりはそれが原因で、今年の「語りの会」は中止になってしまったんだって。四月半ば恐る恐る母さんが電話で川島さんとお話。二人とも残念。そして会の常連さんからもポツリポツリと問い合わせがあるんだって。東京との往来に支障がなくなったら何とか再開したいと母さん達は願っているらしい。せめて二十回までは続けたいというのが念願だったからね。

今年は多分難しいと思うけど、次に川島さんが来てくれたら、また皆で聞きに来てね。

何事も一回、その時、そこに身を寄せる、心を寄せることの大切さを、今回のコロナが教えてくれたと母さんが私につぶやく。ねえ母さん、それって「一期一会」て言うこと？十三才を過ぎて、蓮姉ちゃんのことを時々思い出し私は少々しんみりする。

でも私はワン公。受け容れ上手が長所。ということで。　マ・イイカ　（以下　次号）